
ライバル OR

ウッチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバル OR・・・

【Nコード】

N2389Y

【作者名】

ウッチー

【あらすじ】

拓也は空手歴11年

拓也には宿命のライバルがいる

だが拓也は宿命のライバルである桜に恋心を抱いて？

一期一会

プロローグ

一期一会

一生に一度しかない出会い

もし君がいなかったら
今のオレはないだろう

今ほど強くなっではいなかっただろう

空手をやめてたかもしれない

弱いままの情けない男
で終わっていたかもしれない

オレはあの日からずっと
心にしまっている言葉が
ある

ありがとう

たったこの5文字が伝えられない

それどころか
まともに話したことすら
ない

この気持ちを伝えたい
宿命のライバルである
君に

そして
好きな人である
君に

分かってる

オレと君は戦う運命にあるって

この感情は邪魔になる

でも
伝えたい
この気持ち・・・

第一話

主人公紹介

みなさんこんにちは

この話の主人公

内田 拓也

です

よろしくお願いします？

みんなからはウッチー

もしくはたあー君

と呼ばれてる

オレは中学3年で

4歳から空手を続けて来ている

オレの通っている道場は

草津支部

という道場で

最近、力をつけてきているダークホース的な存在である

この物語は

オレ拓也と

そのライバルの

村元 桜の話である

ここで気づいた人もいるかと思うが
桜は女である

なぜ女がライバルなのか？そう思う人もいるだろう

それはこれからの話すのでお付き合い願いたい
(つまらないかもしれないが)
出来れば見て頂きたい

第二話

草津支部誕生

どうもこんにちは？？
拓也です

読者の皆さんに
オレと桜の関係について
知ってもらうために

過去の話になります
退屈かもしれませんが
お付き合いお願いします

11年前

オレはいつものように
草津幼稚園で友達の

堀^{ほり} 良君^{りょう}

田仲^{たなか} 健汰君^{けんた}

栗原^{くりはら} 大器君^{たいき}

沢田^{さわだ} 翔貴君^{しょうき}

達と話をしていた

拓也「ねえねえ、りょう

、けんちゃん、

今日は何して遊ぶ？

くん、たいちゃん

しょうくん

(＊＼／＼)

良「ぼくはサッカーが

いいな」

健汰「ぼくは野球」

大器「折り紙？」

翔貴 「本が読みたい？」

拓也 「またみんなばらば

じゃんけん？？？

ら？ じゃあ

できめよう」

全員 「じゃんけん・・

？ 「おいみんな」

拓也 「どうしたのひろくん

？」

彼は藤田^{ふじた} 寛^{ひろ}彼もまたオレの友達

寛 「何か知らないおにい

ちゃんが来てるよ

なんか白いふくに

黒いベルトつけてる

人」

健汰 「みんなで行って

みよう」

全員 「うん」

そしてみんなで行って見ると白い服の若い青年が先生と話していた

大器「先生このおにいちゃ

んだれ？」

先生「このおにいちゃん

はみんなに空手を

教えにきた

じんぐう
神宮

先生よ」

神宮「こんにちは？」

みんないつしよに

空手しよう」

良「おもしろいの？」

神宮「おもしろいさ

2階においで」

全員「うん　いくいく？」

そして2階にいくと

1つ上の

やました あや
山下綾

と同じクラスの

まつた かなな
松田 神無もいた

そしてオレたちは先生と

空手をした

オレはなにが楽しいのかわからなかったが

みんなは楽しんでいて

気がついたらお母さんたちが向かえにきていた

拓也以外の全員が

空手を習いたいと声をそろえて言っていた

母「たあーくんはどうする

の？」

拓也「ぼくは……

(どうしようかな

おもしろいくなか

ったしなあゝ

でもあの服かつこ

いいし)

お母さん僕もやる」

こうして草津支部が
結成された

第二話（後書き）

上手くかけなくてすみません

第三話

第三話 昇級

拓也達が空手を始めて半年がすぎた

拓也達の頑張りを認めた
神宮は昇級試験を受けさせた
そして

拓也「ぼく、受かったかな

？」

健汰「大丈夫でしょ」

大器「まあぼくは合格間違

えなしかな？」

翔貴「たいちゃんはいいな

じしんがあって」

寛「ぼくも不安だ？」

良「ぼくも」

拓也「りょう君は上手いか

大丈夫でしょ」

全員「そうだね」

神無「先生きたよ」

神宮「おめでとうみんな

今日からみんな黄色

帯だよ」

全員「やった??」

健汰&大器「黒じゃない」

神宮「黒になるには

白 黄 緑 紫

茶色 黒という順番

なんだよ」

に合格しなきゃだめ

健汰&大器「はい」

神宮「みんなの新しい仲間

を紹介するよ」

井田^{いだ} 準^{じゅん}君だよろしくな

準「みんなよろしく??
りたいな」

僕もはやく黄色帯にな

全員「よろしく」

神宮「みんなそろそろ試合
思っている」

にでてもらおうと

健汰「試合って相手をたお

したらかちなのか？」

神宮「今みんながならって

る型を

4人の審判にみせて

上手なほうの勝ち

だよ」

大器「相手は男だね？」

神宮「型だから女もいつし

よだよ」

大器「わかった」

神宮「みんな頑張ろうな」

全員「はい」

こうして

みんなのデビュー戦が
始まるうとしている

この時拓也は知らなかったこの大会が拓也の人生を大きく変えるこ
とになるとは

そして

アイツと出会ったとは

第三話（後書き）

毎度毎度下手な終わり方ですみません????

次は宿命のライバルである桜との出会いです

第四話

第四話 デビュー戦&出会い

3月

それは毎年空手の試合が行われる月である

その名を

少年大会？

（普通すぎる？）

この試合の結果次第では
県大会、全国大会にでられるのだ

拓也、良、寛、翔貴
「どきどきするな」

大器&健汰

「まあ優勝はぼくかな」

綾「ハハハ？」

神無「優勝できるとしたら
んでしょ」

りょう君かあやちや

良「僕には無理だよ」

あや「わたしも」

拓也「二人はうちのエース

だよ」

寛&翔貴「だよね」

健汰&大器「エースはぼく

だよ」

健汰と大器以外は良と綾をエースとして認めていた
空手を始めて11ヶ月

当然それだけたてば実力にも差が出てくる
頭角をあらわしたのが良と綾だった

今では頭二つぶんぐらい
とびてている

まあ本人たちには自覚がないのだが？

そして試合が始まった

健汰、綾、良はAブロック

翔貴、寛、神無、大器はBブロック

拓也はCブロック

拓也「ぼくひとりだよ？」

試合はAブロックから始まった

期待の良と綾はその実力を発揮しデビュー戦で
ベスト16に入った

健汰は三回戦まで

初出場ということを考えれば上出来だろう

続いてBブロックでは

寛、翔貴、神無が二回戦までいった

本人たちも初勝利に喜んでいた

大器はというと

持ち前の負けん気の強さと自分への自信で
四回戦までいった

初出場ではすごすぎるでしたが、

本人は不満そうだった

拓也「みんなすごいなあ」

良「たあーくんなら大丈夫

だよ」

健汰&大器

「まあ僕より上はむりだろ

うけどがんばって」

翔貴&寛「ファイト」

神無「がんばって」

綾「応援席でみるね」

拓也「ありがとうみんな」そういつて拓也は試合に向かった

副審「それではこれより

一回戦を始めます」

「赤、内君」

拓也「は、はい」

審判「お互い礼、はじめ」

拓也「え？なにになに あれ

はじまつてる

えーと？ えーと？

どうすれば」

初めての試合

みんなは勝ったのに自分だけ負けられない
そういった目には見えないプレッシャーが拓也をおそう

拓也は人一倍緊張しやすい不運なことに
声をかけてくれる仲間が
Cブロックにはいない
拓也の頭の中は真っ白に
なった

そして気づいたときには

副審「判定」

4人の審判がバサツと旗を上げる

副審「白4、赤0で白の勝

ち
礼」

相手「ありがとうございま

した」

拓也はとりあえず列に戻った
そして拓也は自分が負けたことを理解した

拓也「負けた。ぼくは負け
みんな一回は勝った

た。もう次はない
のに」

いつの間にか拓也は大粒の涙をこぼしていた

A「うわ、こいつ泣いてる

よ」

B「だっさ やーい泣き虫」

拓也は何も言わなかった
怒ることすらできなかった

拓也「やめてやる 空手な

なんて大嫌いだ」

拓也が空手をやめる決意をしようとした時だった

？「泣かないで」

そういつて慰めてくれた

？「くやしいよね わたし

もくやしくて一生懸命

練習したんだ

私の名前はさくら

よろしくね

じゃあ私の番だから

行ってくるね」

そういつて桜はいった

気づいたときには泣き止んでずっと桜をみていた

そして

拓也「きれい」

ずっとそうつぶやいていた

今でも忘れられない

11年 たった今でもしっかりと

脳裏に焼き付いている

例えるなら

彼女は「蝶」

「蝶のように舞い蜂のようにさす」

時にきれいで時に力強い

彼女の型はまさしくそれだとそう思った

そして拓也はそのとき

「かつこいい？ ぼくも

あんなふうになりたい」

結局、その試合は桜が優勝した

拓也「さくらちゃんか」

この時拓也はさくらにものすごい憧れをいただいていた
そして空手を頑張ろうと

決意した

第五話

第五話 試合再び

試合が終わって一時間がたとうとしていた

拓也は車の中で考え事をしていた

拓也「結局、あのあとさく

かったな？僕の名前

ありがとうっていい

らちゃんとは話せな

教えてないよ？

たかったのに」

父「そういえばさつき誰と

話してたんだ？」

拓也「さくらちゃん

名字は知らない」

母「ちよつと待ってねええ

あったあった

むらもと さくら

と確かプログラムに

ちゃんね」

父「女なんかになぐさめら

れて情けないぞ」

拓也「うるさい？」

父「帰ったら練習だ」

母「今日は疲れてるんだか

ら休ませてあげて」

父「冗談にきまつてるじゃ

ないか？

にしても拓也

かわいい子だったな

惚れたか？」

拓也「そんなことないにき

まってるじゃん」

この時はただの憧れとしか思ってた

そしてその後の練習から

拓也は目の色を変えて練習した

神宮「いいぞ拓也」

拓也「先生ぼくがんばる」

そして月日は流れ一年がすぎた

草津支部も人数が増えて

15人になった

ただ、変わったことがあるとしたら寛と翔貴が親の都合で引っ越したことだった

準「初めての試合で緊張す

るよ」

良「落ち着いてすれば大丈夫から」

夫だよじゅん君上手い

拓也「ぼくも緊張しちるけ

どがんばろう」

準「うん」

健汰「今年はりよう君が優

勝かな」

大器「かもね」

自分達の力に自信を持っていた大器&健汰までもが
良の力を認めていた

それくらい良の力はすごかった

今年は

神無、大器、良、準が
Aブロック

健汰と拓也がBブロックだった

綾は小学一年生の部で
ベスト16に入った

神無「やっぱあやちゃんす

「こいや」

綾「ありがとう 神無も

がんばって」

Aブロックでは

神無、大器、準が二回戦までいった

準は初勝利を喜んでいたが大器は納得いかないようだ

そして我らがエース良は順調に勝ち進みベスト16までいていた
後一つ勝てばベスト8
そしてその相手は

桜であった

拓也「りよう君とさくらち
手いんだろ」

やんってどっちが上

拓也は興味津々だった
良は白、桜は赤だった
そして

副審「判定赤4、白0で赤の

勝ち 礼」

良&桜「ありがとうござい

ました」

拓也「さくらちゃんって

やっぱりすごい
あのりよう君に
つな なんて」

ストレートで勝

拓也「よし今度は僕の番
とる」

だりよっの敵は僕が

気合い満々の拓也だった

健汰は三回戦までいった

そして拓也は

また一回戦でストレートで負けていた

拓也はまた泣いていた

拓也「なんで僕だけ勝てな

いんだよ」

ずっと泣いていた拓也だったが桜をみてたらなぜか落ち着いた

そして気づいたときには泣き止んでいた

拓也「どうしたらさくら
るんだろっ」

ちゃんみたいになれ

拓也「さくらちゃんにあっ
のって何だろう？」

とりあえずさくらち

てぼくに足りないも
分らない？ でも
やんに追い付く」

そう心に誓った拓也だった

果たしてそれは実現する
のか？

第五話（後書き）

先日、友達にいろいろと指摘されました

小説を書くのが初めてよくわからないので

アドバイスを頂けたら幸いです

第六話

第6話 立教支部

普段は練習が休みの火曜日なのに
なぜか

拓也、準、大器、健汰、良は空手着を着ていた？

それも

大器&健汰はわくわくしている様子である

これは拓也達が小学校に上がる少し前の話である

大器&健汰

「先生いつも同じ場所で

練習するの飽きた」

神宮「そうかもな

う〜ん??????

あ?そつだ???

大器&健汰

「なになに? (わくわく)」

神宮「先生が教えている

立教支部というところか?

があるいつてみない

大器「りつきょうしぶ?」

健汰「変な名前」

神宮「みんななかなか強い

んだけどな」

大器&健汰

「ピク? 行く」

神宮「他のみんなはどうす

る？」

良「ぼくも行きます」

準「ぼくも行こうかな」

綾「私は遠慮します」

神無「わたしも」

神宮「拓也はどうする？」

大器「たあゝくんも行こう

ぜ？」

健汰「そっだよ」

良「頑張ろうよ」

準「たぐやくんもいこうよ」

「？」

拓也「うん」

神宮「決まりだな？じゃあ幼稚園に集合」

来週の火曜日に立教

全員「はい」

そして現在にいたる

今、みんなは立教幼稚園の門の前に立っている

立教幼稚園ではたくさんの門下生が練習していた

大器&健汰

「でかい？」

拓也&準&良

「緊張するよ」

驚くのも無理はない

拓也達の草津支部は二階の一部屋だけでやっているのに対して

立教支部は立教幼稚園の

外全体を使ってやっているのだ

大きな滑り台にブランコ

たくさん遊び道具に

こどもたちはうれしそうで空手のことを忘れていた

すると後ろから

神宮「よく来たな 入れよ

」

そして

神宮と草津支部のみんなが入ると

「こんにちは」

という大きな声で挨拶していた

草津支部のみんなはなんか萎縮していて

まあ無理もないが

神宮「おい慶太ちよつと

来てくれ」

慶太「はい」

神宮「この子達の面倒を

みてくれ」

慶太「はい」

慶太「ぼくの名前は

仲村 慶太

ら けいた)

みんなの名前は？」

よろしくね

(なかむ

大器&健汰

「大器と健汰だよ
よろしくね」

拓也&準&良

「拓也、準、良です
よろしくお願いします」

慶太「みんな元気だね」

神宮は慶太達が話している間に話を進めていた

神宮「みんなこの子達は

先生が教えている

く た子達だ

今日はこの子達と

試合をするからな」

草津支部から来て

和人&雅弘

「強いんですか？」

神宮「戦ってみれば分かる

今から呼ばれたもの

は残ってくれ

後のものはすまない

が見学しててくれ」

そして選ばれた五人以外の人達は隅にいった

雅弘と和人は当然選ばれていた

そして

草津支部VS立教支部の
戦いが始まる

? 注 相手はみんな幼稚園児です

第六話（後書き）

こんにちは

最近更新が送れてすみません???

受験まで後5日しかないんで

なかなか更新ができません

受験が終わったらまた頑張るのでよろしく願いします？

第七話（前書き）

入試終わりました？

第七話

第七話 移籍

神宮「それではこれより

の試合を始める

らな

お互い礼」

草津支部対立教支部

審判は先生がやるか

全員「お願いします」

神宮「慶太、草津支部の順

れ試合は団体戦形式でやるからな」

番はお前が決めてく

慶太「分かりました」

「みんなどうでしょうか？
かな？」

「この中で一番上手い子は だれ

全員「良くんです」

慶太「じゃあ最後は良君で

いこう」

良「分かりました」

慶太「じゃあ

一番目、健汰君

二番目、大器君

三番目、準君

四番

目、拓也君

五番目、良君

これで行こう」

全員「はい」

大器&健汰

「団体戦って何？」

健汰「団体戦っていうのは
って先に三勝した方

ね一チーム五人で戦
の勝ちだよ」

全員「なるほど」

拓也&準

「じゃあけんちゃんみたい

ちゃんと良君で三勝だね

」

大器&健汰

「任せといて」

良「僕が勝てるか分からない

いよ」

慶太「拓也君、準君そんな

上手くなれないよ

気持ちでのぞむなら

自分が勝つつもりで

やらなきゃ

人に頼ってたって

そんないい加減な

今すぐ帰れ

だめだ」

拓也&準「はい

」ごめんなさい」

慶太「分かればいいんだよ

」頑張ろうな」

そう言って拓也と準の頭をなでた

神宮「決まっただみたいだな

」それじゃあ始めるぞ

」型は拳雷の型」

注？拳雷の型とは基本中の基本で試合でも一二回戦で主に使われる

神宮「先鋒前へ」

草津支部の全員

」先鋒って何？」

慶太「試合の順番のことだ

よちなみに

一番目を先鋒

二番目を次鋒

三番目を中堅

四番目を副将

五番目を大将って

いうんだよ」

全員「へえー」

準「大将ってなんかかつこ

いい」

慶太「大将は一番上手い子

がやるんだ」

拓也「だから良君が大将な

んだ」

神宮「先鋒はやくしろ」

健汰「勝ってくる」

全員「頑張つて」

神宮「始め」

健汰は負けた

神宮「次鋒前へ」

大器「僕は負けないぞ」

しかし

大器も負けた

神宮「次、中堅」

準も負けてしまった

これで三勝で立教支部の勝ちが決まった

神宮「次、副将

拓也はやくしろ」

拓也は自分が負けると思っていた。それもそのはず 草津支部で勝ったことがないのは拓也だけだったから誰がみてもわかるくらい拓也の目はしんでいた
そんな時

「ばちーん」

鈍いおとがなった

慶太が拓也を殴っていた

慶太「前にも言ったはずだ
ら帰れ」

いい加減な気持ちな

拓也「ひつく？」

慶太「悔しくないのか皆が
わない

負けて

オレがかたきをとっ
のか」

てやろうと思

拓也「悔しい」

慶太「だったらぶつけて

こい」

拓也「はい」

和人「早くしてよ」

拓也の相手は和人だった

神宮「始め」

拓也「絶対勝つ??」

神宮「こんな拓也初めてみ

すごい気迫だ

慶太のやつ拓也の力

るな

を引き出したな」

慶太「最初に見たときに

眠っているような

みたけど

もしかしたら力が

きがして副将にして

ここまで

とはな

今の和人じゃあ勝て

ない」

神宮「拓也の勝ち」

草津支部のみんな

「やった??」

立教支部のみんなはすでに三勝しているので
今の試合を見ていたのはほんの少しだった

拓也「初めて勝った」

慶太「やればできるじゃん

なよ」

その気持ちを忘れる

拓也「はい」

拓也は初勝利を草津支部のみんななで喜んでいた

慶太「こいつは化けるかも

しれないな」

神宮「次、大将」

次は良対雅弘だった

雅弘もかなりの実力者

だが、良はその上を行く誰から見ても実力差は明らかだった

神宮「良の勝ち」

草津支部のみんな

「さすが良君」

立教支部のみんな

「あいつすげーよ」

雅弘に勝ったぞ」

そして合同練習に入った

神宮「今日はここまで」

全員「ありがとうございます」

した」

神宮「草津支部のみんな

」

今日はとうだった？

大器&健汰

「先生僕もつと頑張るよ」

準「僕も」

拓也「僕も？」

神宮は皆がさらにやる気になってくれて満足そうだ

神宮「良どうしたさっきか

ら黙ったまんまで」

良「先生、僕は立教支部に

移りたいです」

全員「えー？？？？？」

良「ここにはたくさん

先輩達がいるし練習

時間も多い

僕はもっと強くなり

たい」

神宮「良、わかった他には

いないか？」

大器「僕は草津支部が好き

だし、草津支部で勝

ちたいからパス」

健汰「僕も草津がいい」

準「良君がいなくなるのは 寂しいけど僕も草津に残る」

拓也「先生、僕も立教支部に移りたいです」

（みんなと離れるのは辛いけど幼稚園や試合で会えるしそれに僕も強い）

く な り たい

ここで練習すれば さくらちゃんに

追いつけるかも

神宮「分かった じゃあ来週から

ここに こい」

拓也 & 良
「はい」

こうして拓也達は立教支部に移籍した

第七話（後書き）

なんかスポコンになりすぎてるような？

次は恋愛要素を入れていきたいと思っています

第八話

第八話 デート前編

拓也達が立教支部に移籍して二週間が過ぎた
良の方は実力をみんなに認められ気づいたら良の周りには人がたくさん集まっていた

拓也は人見知りのせいで
なかなか馴染めなかったが

和人「おい拓也」

拓也「えーと」

和人「和人だよ」

拓也「よろしく和人君」

和人「よろしくな」

ツ　　すごいな良とか言っ

それにしてもアイ
たけ？」

拓也「うん。良君はすごいよね」

和人「でも、拓也もすごいって？一緒に頑張ろうな」

拓也「ありがとう。頑張ろうね」

雅弘「俺は雅弘。よろしくな。一緒に頑張ろう」

拓也「うん。よろしく」

拓也にもやっと友達ができた

慶太「よお拓也。ここには

慣れたか？」

拓也「あ！慶太先輩お疲れ様です。まだ慣れませんね」

慶太「ゆっくりでいいからな。わからないことは何でも聞いてくれよ」

拓也「はい。ありがとうございます」

練習が終わり拓也は
家に帰ってきてゆっくりしていた

母「拓也電話だよ」

拓也「誰から？」

母「優ちゃんから」

優ちゃんとは拓也の幼なじみである
水戸 優である

拓也「もしもし、優ちゃん」

優「もしもしたあーくん？」

優「ただど？明日ひまかな？」

拓也「明日は日曜日だし特に何もないけど」

優「あのさ明日一緒に健康公園に行かない？久しぶりにたあーくんと話したいし」

注？健康公園とはとても大きな公園でたくさんのアスレチックやプールに芝生

バスケットコートなどがある

拓也「うん？いいよ。いつものメンバーだよね」

拓也のいういつものメンバーとは

優の兄である真一と

拓也と優の幼なじみである広太郎とその兄である一正のことである
一正は拓也達より一つ上 真一は二つ年上である

拓也達のお母さん達が

高校時代のクラスメートで大親友だった

だから

幼稚園こそ違っけれども

この五人よく一緒に遊んでいてとても仲がいい

来年は拓也達は同じ小学校に通う予定だった

しかし

運命のいたずらか

優達は岡山。

広太郎達は広島に引っ越してしまう

みんな来週には引っ越してしまう

寂しくなるが一生会えなくなるわけではないので
拓也はそこまでショックはうけていなかった

優「あの、えーと、その
（ドキドキ）たぁーくん
と二人で行きたいなぁなんて思ってたたりしてたりしてなかったり
ダメかな？」

拓也「いいよ？」

優「やった（＾　＾）」

拓也「でも、健康公園って歩いて行くにはちょっと遠くない？」

優「大丈夫だよ。優のお母さんが車でおくってくれるって」

拓也「分かった。明日ね」

優「うん。ばいばい」

拓也「お母さん、明日は優ちゃんと健康公園で遊ぶことになった。
おばちゃんを迎えに来てくれるって」

母「分かった。楽しんでおいで」

場所は変わって水戸家

優「お母さん、あーくんOKだったよ？明日はよろしく」

優の母「了解。もうすぐ引っ越しだからちゃんとたあーくんにちゃんと言いたいことは言っておくのよ」

優「はい。明日はたのしみだな？」

果たして優は拓也に言いたいことをちゃんと伝えられるか？

後編に続く？

第九話

第九話 デート中編

今日は拓也と優が二人で遊ぶ日である。

優は何時もよりもはやく起きていた。

そして

優は布団の中で拓也のことを考えていた。

優「たあーくんとは同じ月に同じ病院で生まれたんだよな。お母さん達が仲良しだからよくたあーくんとは一緒に遊んだ。広ちゃんよりも遊んだ回数は多いかも。いつの間にかたあーくんが近くにるのが当たり前のようになってた。このまま同じ小学校、中学校、高校に行くんだってそう思ってた。でも、突然きまった引越。たあーくんに会えなくなる。そう思うと胸が苦しかった。そしてやっと分かった。私はたあーくんのことが好きだってことに。だから今日は頑張ろ」そう決心する優だった。幼稚園生でこんなことを考えるなんてやはり女の子の精神年齢は実際のとしよりも上と言われるだけある

優の母「優もうごはん食べなさい。」

優「はい」

そして優はごはんを食べた。

そして車に乗って拓也の家に行った。

優「おはようたぁーくん」

拓也「おはよう優ちゃん」

拓也の母「おはよう真理今日はよろしくね」

優の母「おはようー美任せてよ」

拓也「お母さん行ってきます??」

車の中では

いろいろなはなしをしたり歌ったりした

拓也&優

「春色の汽車に乗って海に連れて行ってよ？」

優の母「（古????ちよつとあんた達何歳よ？もっと幼稚園生らしい歌にしないよ）」

心の中でツツコミを入れる優の母だった。？

拓也&優「赤いスイトピー？」

歌い終わると同時に公園に着いた。

優の母「二人とも着いたよ？楽しんできてね。夕方には迎えにくるからね。優、片方の携帯預けとくから何かあったら電話して」

優の母は携帯を二つ持っていて二つを使い分けている

優「ありがとうお母さん。行ってきます」

拓也「おばさんありがとうございます」

優の母「はい」

そして拓也と優は歩きだした。

拓也「優ちゃん、まずはどうする？」

優「まずはロープウエーに乗って向こうの子ども広場に行こう」

拓也「うん」

拓也と優はロープウエーに乗った
？（無料です）

ロープウエーの中

優「ねえ、たあーくんは好きな人いるの？（きいちゃった????）」

拓也「うーんだれが好きかなんて考えたことないから分からないや」

優「そうなんだあ（じゃあ優にもチャンスがあるかもしれないな？）」

拓也「優ちゃんは好きな人いるの？」

優は顔を真っ赤にしている

優「えー????わ、わたし？あの、その、えーと、（どうしようこれってチャンスなのかな？）」

優がそう考えるときに拓也が声をかけてきた

拓也「優ちゃんが私っていうの珍しいね」

優の普段の一人称は「優」だから拓也は少し不思議に思っていた

優「優も時々私っていうときもあるよ」

拓也「そうなんだ。あ？着いたよ」

こうして拓也と優は降りていった。

優「（せっかくのチャンスだったのに？）」
心の中で思う優だった。

拓也「優ちゃんアスレチックマウンテンに着いたよ右から登るそれとも左から？」

優「（そうだ？アスレチックマウンテンの頂上でたぁーくんにお
う）

第九話（後書き）

まだまだ続きます

第十話

第十話デート後編

優は考えていた。

優「確かアスレチックマウンテンの頂上は左からの方が近道だった気がする。はやく頂上について心の準備をしとこう」

拓也「優ちゃん???」

いつもと違う優に拓也は気づき声をかけた

優「たあーくんは右からで優は左からで競争ね。スタート」

そして優は走っていった。

拓也「優ちゃんってあんなに走るの早かったっけ？何か今日はすごいやる気だな？まあ僕はゆったり行こ」そして、拓也も行った。

優はというともものすごい勢いで走った後、長い長いトンネルに苦戦していた

優「暗いのこわいよ？近道は右だったかな？くよくよしてても仕方ないいくぞお？」

優は懸命にどんどん進んで行った。

優の推測どおり近道は右だった。優の方は上級者向けだった。

一方、拓也はというと

拓也「頂上は気持ちいいな？？？」

拓也はすでに頂上についていた。

拓也の方は初心者用ということも会ったが拓也の家族は登山好きなのでかなり山を登っている

拓也も三歳の頃から山に登っており近いうちに富士山も登る予定だから拓也は

通称「薩摩富士」と呼ばれる開門岳を何回も登って鍛えてきた。

拓也にとってはアスレチックマウンテンに登ることなど難しいことではなかった。

拓也「上から眺める景色はきれいだなあ」

拓也は頂上の景色を見ながら考えごとをしていた

拓也「そういえば僕ってさくらちゃんとともに話したことなかったな。今度話してみようかな」

そう考えてた矢先景色を眺めていると

拓也「あ？あれはさくらちゃんだ」

なんとという偶然桜も健康公園にきていた。

桜は一人でブランコにのっていた。

拓也「さくらちゃん一人で来たのかな？」

拓也がそう思っ
て見ていると桜の前に一人の男が現れた。歳は拓也達と同じくらいである。桜は満面の笑みで男をむかえている。

拓也「なんだろう？この気持ちは？よくわからないけどあまりいい

気分ではないな。それになんでさくらちゃんのあの笑顔を見たとき胸がドキドキしたんだろう？」

この時拓也は思っていたこの笑顔が自分に向けられているものならどんなにいいものだろうかと。

拓也はずっと桜達を見ていた。そう

「???」

「ーくん」

「あーくん」

「たあーくん」

「たあーくんてば」

「た~~~~く~~~~や~~~~?」

拓也「あ? 優ちゃん?」

優「あ? 優ちゃん? じゃないよ? さっきからずーとぼっくとしてさ。心配して何回も呼んでるのに反応しないし」

拓也「ごめんごめん。ちょっと考え事してたから」

そう拓也は周りの声も聞こえないほどに集中して桜達を見ていたのだった

その間に優が頂上についていたのだった。

優「考え事？何かあったの」

拓也「何でもないよ。それよりこれからどうする？」

優「とりあえずもう少しここでゆったりしてから昼ごはんを食べよう（たあーくんがこの状態じゃなあ）」

拓也「分かった？」

そうして二人は景色を楽しんだ後アスレチックマウンテンを降り、芝生に敷物を置いて昼ごはんを食べていた。

拓也達はお互いの幼稚園での話しなどで盛り上がっていた

拓也はふと何かを思いだしたかなのように話しを変えた

拓也「そういえばさっき優ちゃんロープウエーで何かいいかけてなかった？」

優「えーと、そのたぁーくと話すの楽しいなぁーって」

すると拓也の表情が真面目になり

拓也「優ちゃん」

優「な、何？（もしかして今ので気づいちゃた）」

拓也「トイレに行ってくる」

優「・・・・・・・・？？？分かった」

この時優はカラスがアホーアホーと言っている気がした？

優「（たぁーくんのバカ）」

心の中で思う優だった。

一方拓也はトイレに行くというのは口実で本当の目的は桜を探すことだった

拓也「なんでか分からないけどさくらちゃんのことをすごく気になる」

懸命に探す拓也だったがあきらめて帰ってきた

優「お帰ったあーくん。フリスビーしない？」

拓也「うん。いいよ。」

そうして二人はフリスビーを始めた。

優「えい？」
ビュー

パシッ
拓也が捕る

優「ナイスキャッチ」

拓也「もう何回投げたかもわからないや。え？あれってさくらちやん」

ドカ
拓也の顔面に直撃した

拓也「痛い」

優「ごめん。たあーくん。大丈夫？」

拓也「うん。ごめん。ぼーっとしてた（？）までよさくらちゃんの方に飛ばして拾いに行っ^て話してみよう。話せばこの気持ち分かるかも（行くよ。「ビシュ

優「つとこんな高いの捕れないよ」

frisbeeは拓也の思惑通りに桜の方に

拓也「ねらいどおり
のはずだったが

ククッ
拓也「そんな馬鹿な」

frisbeeは弧を描いて拓也のもとへと返ってきた

優「たぁーくんすごい?？」

拓也「ハハハ?。あっちのベンチで少し休もう」

優「うん」

拓也は黙ってベンチに座っていた。

優は心配して拓也に話しかけたが反応をしない

優もとうとう我慢できずに拓也の頬にビンタした

拓也は何がおこったかわからなかった

優「たぁーくんなんかもう知らない。たぁーくんなんて大嫌い」

そう言って優は走りだした

拓也はどうすればいいか分からなかったが冷静に考え

拓也「優ちゃんと遊びに来たのにさくらちゃんのことばかり考えてた優ちゃんが怒るのも無理はない探さなきゃ」

そうして拓也は優を探す

拓也「あれから何時間くらい探したらだろっ。もうすぐ暗くなる。急がなきゃ」

拓也は懸命に優を探す

そして。やっと優を見つけた。優は大きな犬に追いかけていた。

拓也は優の前に立ち犬を睨み付けた。

犬は逃げていった

優「たぁーくんありがとう」

拓也「優ちゃん、ごめん。僕、せっかく優ちゃんと遊びに来たのに
つまらなくしちゃって」

優「ううん。優の方こそ叩いちゃてごめん。さっきのたぁーくんが
っこよかったよ。たぁーくんのこと大嫌いって言っちゃたけど本当
は優、たぁーくんのこと大好きだよ（言っちゃた？）」
するとその時パアッと辺りが光りだした。

健康公園はよるのイルミネーションでも有名である。

優「（このタイミングで？まるでよくやったって言ってるみたい）」

拓也「僕も優ちゃん好きだよ」

優「（やった???）」
話しは最後まで聞くものである

拓也「だから、これからもいい友達でいようね」

優「うん。（今はこれでいいや。でもいつか）そうだたあーくんこれ」

そう言っつて優はポケットから何か取り出した。

拓也「これって僕？」

優から渡された物は空手着をきた人形だった

優「うん。そうだよ。」

拓也「黒帯なんだあ」

優「うん。ずっとたあーくんに持ってた欲しいから」

拓也「ありがとう。大事にする」

優「優のこと絶対に忘れないでね。」

拓也「当たり前だよ」

優「そろそろ帰ろうか」

優は携帯で優の母に電話して迎えにきてもらった。

一週間後

優は引越していった。

優「たあーくん気づいてくれるかな？あの人形の秘密」

あの人形には

小さく相合い傘でお互いの名前が書かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2389y/>

ライバル OR

2011年12月1日16時50分発行